

インドネシア語劇上演による言語学習の効果

岡部 政美

アジア太平洋無形文化遺産研究センター

The effects of language learning through performing Indonesian drama

Okabe Masami

International Research Center for Intangible Cultural
Heritage in the Asia-Pacific Region

1. はじめに

神田外語大学のインドネシア専攻では毎年、2年次の学生全員でインドネシア語劇を上演している。学生たちは必修授業のなかで10月末の学園祭での上演に向け、前期からおよそ半年をかけて準備を行う。おおまかには前期で台本を作り、後期から舞台稽古を始め台詞の暗記や演技、日本語字幕の作成、大道具・小道具の制作などを行う。後期に入ると学生たちは、授業外でも多くの時間を語劇制作に費やす。約1時間の舞台ではバティックやクバヤなど¹、インドネシアの民族衣装を身に付け、音楽にはバリガムランの生演奏を用い、舞踊もフル・コスチュームを付けて上演するなど現地の雰囲気十分に感じられる内容となる。観客の多くは日本人であるため舞台の脇に日本語字幕も出す。ゼロから学生主体で創り上げる手

¹ バティック batik はろうけつ染めの布で、インドネシアでは普段着から正装まで幅広く使用されている。クバヤ kebaya は女性が着用するブラウスで、伝統衣装として用いられることが多い。

作りの演劇である。語劇上演は学生にとって大きな行事であり相当なエネルギーを注ぎ込んでいる。例年、上演後の監督（学生）の舞台挨拶では多くの学生が感極まって涙ぐむ姿が見られる。

本稿の目的は、それだけ時間と労力をかけた語劇上演は、はたしてインドネシア語のこういった技能を向上させることができるのか、上演後に行ったアンケートと授業の様子から分析することにある。

2. 新学習指導要領に見る外国語教育

文部科学省によれば 2020 年度のから順次実施される新しい学習指導要領の基本的な考え方は「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」にあり、「生きる力」を育むために「何ができるようになるか」ではなく、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」になっているか、という 3 点を重視している²。外国語教育に関しては、2021 年度から実施される中学校の新指導要領を解説した『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説—外国語編』の 12～15 頁に、従来通り外国語の 4 技能（聞く・読む・話す・書く）を基本としながら、それらを「実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につけるようにする」ために、読み・書きよりも、聞き・話す技能により重点を置くこと、および「目的や場面、状況」に応じたコミュニケーション力を養うことを重視すると記されている。

これは改訂前の学習指導要領における外国語科の 3 つの目標、すなわち①言語や文化に対する理解、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、③聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う³、という基本的な外

² 2020 年 8 月 29 日アクセスの文部科学省のホームページより
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm

³ 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説—外国語編』12 頁

国語学習を目指す段階から、一層踏み込んで「目的・場面・状況」など、自分の置かれたコミュニケーション環境に柔軟に対応する高度な外国語の運用能力を養成する段階にいたったといえる。こういった外国語の能力は、上述の新しい学習指導要領の基本的な考えに照らし合わせれば、主体的・対話的で深い学びによって獲得できる性質のものであり、まさにアクティブ・ラーニングが必要とされているのだろう。

アクティブ・ラーニングとは、文部科学省の作成した用語集 37 頁に⁴、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」であり（中略）、「発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」と定められている。インドネシア語劇は学生主体で制作しており、教員による一方向的な講義とは全く異なる、主体的で深い学びである点で、まさしくアクティブ・ラーニングであるが、はたして「目的・場面・状況」に応じて、聞き・話す言語運用能力を伸ばす方法として有効であるのか、またそうであるなら、こういった点で有効であるのか、こういった点から以下に検討していきたい。

3. インドネシア語劇制作のあらまし

まず 2019 年度の授業を例にインドネシア語劇制作のあらま시를記す。

【概要】

参加者：インドネシア語専攻 2 年次（2 クラス合計 35 名）

⁴ 2020 年 8 月 29 日アクセスの文部科学省のホームページより
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf

語劇タイトル：Telaga Bidadari（湖の天女）

上演日：2019年10月26日（土）12時45分～

（学園祭にて上演）

上演時間：1時間

【学生の担当】

役16人

アワン・スクマ(主人公)、うさぎ、鹿、鳥、狩人1～3、天女
1～7、黒い鶏、クマラ・サリ（主人公の子）

役以外19人

監督、副監督、ナレーター、字幕4人、照明3人、舞踊3人、
ガムラン3人

【台本】

3,240文字、A4で13枚

【制作過程】

前期

初回の授業（「インドネシア語基礎」）で上演する物語を決める。あらかじめ教員が候補の物語を3冊選んでおき、あらすじをごく簡単に紹介したあと学生の多数決で選択する。2019年度はTelaga Bidadariというインドネシアの伝説を取り上げた。内容は湖で水浴びを楽しんでいた天女が羽衣を奪われ天界に戻れなくなり、やむなく羽衣を盗んだ人間の男性と結婚するという羽衣伝説である。日本語のタイトルは「湖の天女」とした。元となった本はインドネシアで出版された子供向けの本で挿絵を入れて全21頁あった。この本を第2回目の授業から5回程度かけて精読をする。これを5月半ばから末までに終える。

次に5月末頃から台本作りに入る。授業で台本作りの注意点について説明し⁵、クラスごとに全頁を学生数で割り振る。これは6

⁵ 主な注意点は、①地語りと登場人物の台詞に分けて記すこと、②観客に物語の背景が分かるように、地語りと台詞を工夫すること、③インドネシ

月末までの授業時間外での課題とし、提出された台本を教員がとりまとめ、インドネシア語のネイティブ教員に校正と脚色を依頼する。

後期

後期からは週 2 コマの授業を語劇の舞台稽古にあてる。初回授業で台本配布、役発表、読み稽古を行う。並行して台本作りの時と同様に、授業外の課題として全員で分担して日本語字幕を作る。およそ 9 月中の 4 回の稽古で台詞を覚え、演技をしながら登場人物の心理や、そこがどういった場所で、誰が何を何のためにしようとしているのかなど、各場面の状況把握に努め、10 月からは台本を持たずに舞台上がり字幕、音楽、照明、大道具の出し入れのタイミング等を調整するなど本格的な舞台制作に入る。2019 年度は授業としては 11 回分を語劇の稽古にあてたが、学生は授業外でかなりの時間を語劇の制作に費やす。学園祭準備のため休講になる、本番前の 2 日間も自主的に稽古を行っている。

【2019 年度インドネシア語劇制作タイムテーブル】

| | |
|--------------|---|
| 4～5 月 | 物語の選択と精読 |
| 5 月末 ～6 月 | 台本作成 |
| 9 月半ば | 稽古開始 |
| 9/18 水 | 台本配布、役発表、読み稽古、字幕作成 |
| 9/20 金 | 台本の読み合わせ 【場の状況と雰囲気をつかむ段階】 |
| 9/25 水 | 台本の前半までの舞台稽古 役のない学生は小道具づくり（道具を作りながら舞台稽古をみる学生もいる） |

ア語を理解する人にしか分からないような単語は、適切な言葉に置き換えたり、説明文を加えたりすることなど。

| | |
|---------|--|
| 9/27 金 | 台本の後半から舞台稽古 【場の状況を理解しながら台詞を覚える段階】 |
| 10/2 水 | 通し稽古 |
| 10/4 金 | 通し稽古 舞台での台本使用禁止 ガムラン音楽を入れるタイミングの打ち合わせ 字幕係は舞台を見ながら字幕を出すタイミング、字幕の幕割と日本語の確認・修正 照明係は舞台を見ながら照明の明るさ、スポットライトを当てる場所などを調整 以後、本番までガムラン音楽、字幕係、照明係は舞台を見ながら調整を行う |
| 10/9 水 | 通し稽古 衣装を付けてチラシ用の写真撮影 そのまま衣装を付けて稽古 |
| 10/11 金 | 通し稽古 大道具の出し入れの稽古 |
| 10/16 水 | 通し稽古 |
| 10/18 金 | 通し稽古 |
| 10/23 水 | 通し稽古 |

【稽古の進め方と内容】

語劇制作は学生の監督（1人）と副監督（1人）を中心に進めていく。稽古は出欠確認の後、監督が進行役となり、初めにその日の稽古の課題、たとえば「もう全員、台詞を覚えてきているので棒読みではなく感情を込めて言うようにしましょう」「自分の台詞だけでなく前後の台詞を覚えて、自分のしゃべるタイミングを間違えないで」など具体的な目標を学生全員に伝え、稽古の終わりには、そ

の日の稽古の感想や次回までの課題なども伝えていた⁶。

演技や大道具・小道具の使用、音楽や照明の具合などは監督を中心に教員と話し合いながら決めていく。字幕係は学生全員で作った字幕をもとに、舞台を見ながら文章の修正、幕割、スライド数の調整など推敲を重ねる。照明係も舞台を見ながら、照明を当てる位置やタイミング、照度の加減を調整していく。ガムランと舞踊担当も、稽古を見ながら演奏や踊るタイミングを頭に入れていく。

およそ9月中に役のある学生は台詞を覚える。初めはほとんどの学生が棒読みだが、次第に演技をしながら感情を込めて言う練習をして、場面ごとの状況や雰囲気をつんでいく。10月に入ると通し稽古に入り、大道具・小道具、照明、字幕、音楽・舞踊も入れる。

【教員の役割】

教員は学生の自主性を尊重する。そのうえでネイティブ教員は台本の修正と脚色、演技指導、例えばインドネシア人特有の驚き方や、感情を込めた台詞の言い方などを指導し、日本語教員はもとのテキストと台本の精読および、通常の授業であまり扱わない語彙、例えば Ibunda（お母様）や Kahyangan（天界）といった単語の細かなニュアンスや概念、それらの言葉の現地での使われ方、登場人物の行為の文化的背景を解説したり、字幕係と相談しながら字幕を推敲したりする。

4. 「2019年度インドネシア語劇制作に関するアンケート」分析

次に語劇上演後の11月中旬に行った語劇制作に関するアンケート結果を紹介し、学習効果を分析していく。回答者は29名、無記名としたが役あり（16名）、役以外（13名）のみ記入とした。

⁶ 2019年度の監督は稽古中に「良くなったよ」「いいよ、いいよ」と舞台上の学生を褒めたり、稽古の終わりに、その日に達成できたことを伝えるなど、語劇上演に向けて雰囲気を盛り上げるムードメーカーとしての役割も大きかった。

質問 1. 語劇制作を通して、聞く・話す・読む・書くのどの技能が最も伸びたと感じましたか。

| | 役あり | 役以外 | 合計 |
|----|-----|-----|----|
| 聞く | 3 | 6 | 9 |
| 話す | 10 | 2 | 12 |
| 読む | 3 | 4 | 7 |
| 書く | 0 | 0 | 0 |

「聞く」に回答した理由

役あり

「自分の台詞の前後を覚えて聞いて自分の台詞のタイミングで言えるようにしたから」

「お互いに練習したり、みんなの台詞を何回も聞いていたから」

役以外

「音楽担当でしたが、台本全体の意味をしっかりと理解して音楽を演奏することを意識しました」

「字幕と劇を照らし合わせてやることで聞く力がついたと思う」

「役者が読む台詞を理解できたから」

「台本を聞きながら照明を操作したため」

「結構聴き取れたと思うから」

「話す」に回答した理由

役あり

「台詞を言ったり覚えたりしたから」

「こんな言い方があるんだなあって思った」

「台詞をしゃべったから」

「自分の台詞を覚えたり他の人の台詞を聴き続けていたからフレーズで意味を覚えたり、その単語の使い方を知ることが

できた」

「自分の台詞を含め他の人の台詞も覚え話すことがあったら」

「話す場面が多く発音を気にしながら台詞を言ったから」

「自分以外の人の台詞を聴く

機会の方が多かったから」

「自分の台詞を覚えて話していくことで話し方や単語の使い方が分かった」

「台本を声に出して何度も読んだから」

「知らない単語をたくさん話したから」

「練習がたくさんあったから」

役以外

「ナレーターで発音などを気にしながら原稿を読んだから」

「役の子たちにアドバイスをする際に台詞を言いながらしていたから。どのようにジェスチャーをするのかなど考える時にいつも声に出していたから」

「読む」に回答した理由

役あり

「台本を何度も読んだため」

「台本を声に出して何度も読んだ」

役以外

「字幕係だったから」

「字幕だったからです。担当の部分をたくさん読んで何回も推敲し練り直し、より自然な日本語へと変換していったからです」

「舞踊担当でしたが物語でのやり取りや心情を読み取るため何度も読み、読み取る能力が上がったと思います」

質問2. 役を演じた人は台詞をいつ、どういった方法でどのくらいの時間をかけて覚えましたか

- 「演じる時に動きと一緒に覚えました」
- 「何度も口に出して覚えた」
- 「登下校の時に読みながら来た」
- 「家で何回も読んで、それを友だちの前で披露してもっとどうすべきか教えてもらった」
- 「自宅と練習時間に、ひたすら台詞を読み先生に教えていただいたアクセントなどに気を付けて読みました」
- 「家で音読して覚えてその後、会話相手とスムーズに言葉が出てくるまで練習した」
- 「電車の中で一人で何度も読んだ」
- 「授業中、空き時間、家でひたすら読んで覚えた」
- 「授業中に練習をいっぱいした」

質問 3 . 語劇を制作したことでインドネシア語の学習意欲は向上しましたか。

| | 役あり | 役以外 | 合計 |
|-------|-----|-----|----|
| 向上した | 15 | 11 | 26 |
| 変わらない | 1 | 2 | 3 |

向上した理由

役あり

- 「台本を訳していくことでいろいろな話し言葉の使い方が学べたから」
- 「知らない表現や新しいインドネシア語を知ることができ、もっと知りたいと思った」
- 「台本は難しかったけど、もっと理解したいと思った」
- 「普段授業で使わないような単語が出てきたので覚えようとした」
- 「新しい単語やフレーズが出てきたから」

- 「語劇で出てきた単語や台詞が（ほかの授業などで出てくると）学習できたと思った」
- 「知らなかった単語が多くあり、もっとインドネシア語を学習しなければと思った」
- 「いつも習っている言葉よりもっと、くだけている感じで、そっちの言葉も覚えてみたい」
- 「話し言葉など普段の授業では使わないような言葉に触れることでもっと学びたいと思うようになった」
- 「舞台上で演じたようにスラスラ話せたらいいなと思った」
- 「普段使わない単語に触れてもっと知りたいと思ったから」
- 「ボキャブラリーが増えたから」
- 「表現をたくさん学べたから」

役以外

- 「難しい単語が多くて悔しかったから」
- 「言葉を使う状況が分かりやすかったから」
- 「改めてインドネシア語が好きになりました」
- 「分からない単語があって悔しくていつもより勉強したから」
- 「劇の内容をインドネシア語で理解できるように学習しなくては、という気持ちになりました」
- 「台詞一つ一つの日本語訳を考えることでより面白く劇を見れました」
- 「インドネシア語を意識することが楽しかった」
- 「知らない単語がたくさんあってスクリプトも理解が難しかったが、それが理解できた時すごくうれしくてもっとできるようになりたいと思った」

質問4. 印象に残っている単語は何ですか

monggo-monggo (5人), sampurasun(5人),
cie-cie (4人), rampes(4人), kahyangan (4人), awas (4人),

jangan-jangan (3人) , silakan masuk (2人) ,
Angin sepoi-sepoi(2人). Jangan tinggalkan kami.
berisik, pemberani, rusa, klinici, bergerak-gerak,
kenapa kanda, jangan-gjangan, bidadari, ayahnda,
Aku mendengar sesuatu yang mencurigakan.
membuat, egois, menaruhkan, berwibawa,
gagah, kenapa kanda, Permissi kulonuwun. Hei,coba lihat.
Itu namanya ikan emas. Permissi, Surya-Surya.

質問5. 語劇でしか学べなかった語学の技能は何ですか。

役あり

会話で使う言葉 (5人) 、暗記(3人)

授業では学ばない単語や地方語 (2人)

感情をこめて話すこと、書く、発音

役以外

地方語 (3人) 、意識でどれだけ短く簡単にするか、

間の取り方、自然な言い回し、

敬語とくだけた言い方の使い分けがより分かるようになった

リアクションの言葉、聞く力

質問6. 語学力のほかに語劇で得たものはありますか

役あり

団結力(12人)、演技力(2人)、辛抱強さ

役以外

団結力 (6人) 、照明技術、インドネシアの文化、

パワーポイント、短期間で何かをする力、

計画・予定をたてることの大変さ、

まとめることの大変さ、

他のクラスの人と仲良くなれた

質問7. 後輩にアドバイスをお願いします

役あり

「台詞はなるべく早く覚えて！」（6人）

「役がある人もない人も自分の役割を全力でやって楽しんでください」

「どの仕事も平等に大変だということを忘れないで取り組むこと、期間が短くてもみんなで頑張ると劇は完成します」

「台詞の少ない人は他の人の台詞を心のなかで言って理解していくとレベルアップします」

「いやだなとか恥ずかしいと思って出来なかったとしても他に頑張っている人を見て、その人のために頑張ろうと思ってチャレンジしてみるといいと思います」

役以外

「すべての場面で落ち着いて対処してください」

「主役でなくても役を演じるかパワポをするなど、とにかくインドネシア語に多く触れたほうが絶対いいです」

「ケンカはやめましょう」

「協調性は大事です」

「仲が悪くなるかもしれないけど、絶えてなるべくコミュニケーションをとってよい語劇になるようにがんばってください」

「自分の役割は責任をもって最後までやり遂げること」

「大変だけど終わればやってよかったと思えるよ」

「協力的な姿勢が大事」

「割とみんなギスギスします。気を付けてください」

以上が語劇制作に関するアンケート結果である。次に各質問への回答を分析していく。

まず質問1の「聞く・話す・読む・書く」のどの技能が伸びたかとの問いには、9名が「聞く」、12名が「話す」、7名が「読む」、0名が「書く」と回答した。台詞を用いるため「話す」が多いのは

自然であるが、9名が「聞く」能力が最も伸びたと感じていた。その理由としては、役のある学生は自分が台詞を発するタイミングを誤らないように、前後の役の台詞もしっかり聞いて覚える必要があること、一方、音楽・字幕・照明の係の学生は、演奏や字幕を切り替えるタイミング、照明の操作などを誤らないために、集中して舞台を見ておく必要があることにある。

「話す」については、役のある学生は自分の台詞を何度も練習したから、という単純な理由だけでなく、新たな言い回しを知ったり、その言葉を使う状況を理解できたり、何度も他の学生の台詞を聞いていたために自然と覚えたという理由が多くみられた。役以外の学生については、ナレーターは最も多くの言葉を発したほか、監督は役のある学生の演技指導をするときに、自ら何度も台詞を声に出しながら行っていたことを理由にあげていた。

「読む」に回答した学生が7名いた理由としては、伝説を扱ったため、もとのテキストも台本も通常の授業であまり使わない語彙が多く使われていたこと、および台本のインドネシア語は、当時の学生たちの能力よりやや難しめであったため、全員が読むことに労力を使ったためと推測できる。また7名のうち回答内容から少なくとも2人は字幕係だったことが分かる。彼女らは場面ごとの雰囲気や、学生個人や役の個性、友人同士なのか上下関係にあるのかといった役同士の間柄などから、どの一人称や呼称、尊称が適切であるのか何度も検討したほか、インドネシア語の台本と照らし合わせながら、より自然な日本語に置き換えること、観客が舞台に集中できるように出来る限り短い日本語にすることに気を配りながら、何度も台本を見直し字幕の推敲を重ねた。字幕の文章は、稽古が進み演技が上達したり、場ごとの雰囲気が創り出されるようになるにつれ、より相応しい文章に修正していった。稽古中、字幕係は日本人教員の近くに座って、相談しながら字幕の確認・修正を行っていた。

次に質問2の回答から、役を演じた学生は相当な時間をかけて、繰り返し台詞を口に出して覚えたことが伺える。通常の授業では、

カリキュラム消化のために時間が制限され、テキストを読む練習は、発音の確認をしながら多くても2回程度しか行えず、違う授業日に読み返すこともまず出来ない。代わりに学生には授業外で、何度も繰り返し読み、口に落ち着けるように指導しているが、学生にとっても授業ごとに、新たな文章に接するため（1、2年次はインドネシア語の必修授業が毎日ある）、音読練習をする回数は限られると思われる。だが語劇の稽古では毎回、半ば強制的に「聞く・話す」を繰り返すことになる。さらにそれぞれの台詞は学生の個性的なしゃべり方が耳に残ったり、観客の笑いを誘うなど印象的な場面での台詞は自然と覚えやすくなる。実際に印象に残っている単語を聞いた質問4では、主人公が結婚する場面での冷やかしの言葉(cie-cie)や、個性的な口調だった学生の台詞が挙げられていた。

質問3では、語劇制作を通してインドネシア語の学習意欲が向上したかと問うたが、26名が向上したと回答した。その理由の多くは、話し言葉や通常の授業で取り上げないような語彙や言い回しを多く学べたことにあり、演技を伴っていたためか言葉を使う状況が分かりやすかった、あるいは、もっと他の話し言葉を学びたくなった、舞台上と同じようにスラスラ話したい、など大半の学生が、より日常生活に活かせるコミュニケーション力を高めようという意欲が刺激されたようである。一方で少数ながら、知らない単語が多かったり、台本がやや難しめだったことへの悔しさから、学習意欲を新たにしたという回答もあった。

質問4では、印象に残っている単語を挙げてもらったが、回答の上位には、耳慣れない地方語(monggo-monggo, sampurasunなど)のほか、日常会話で頻繁に使われるが授業ではあまり出てこない話し言葉(cie-cieやawas)が入っていた。Monggo-monggoはジャワ語で「どうぞ、どうぞ」、sampurasunはスダ語で「こんにちは」くらいの意味で現地ではよく耳にするため覚えておくと便利である。cie-cieは既述のように冷やかしの言葉で、awasは「危ない！」と注意を促す言葉であり、こちらも実用的であり覚えておくとよい。

注目したいのは *Jangan tinggalkan kami.* (「置いていかないで」の意) と *Aku mendengar sesuatu yang mencurigakan.* (「何かあやしい音を聞いたぞ」の意) と、文章がまるごと挙げられたことである。多くの学生たちが混乱するインドネシア語の文法に、他動詞の使い方がある。上の文では *tinggalkan* と *mencurigakan* が他動詞となる。分かりにくさの要因はこの場合、他動詞であるのに直後に目的語を伴わないことにある。*Tinggalkan* であれば直後に *kami* という目的語を用いているので問題ないが、学生は *mencurigakan* の直後に目的語が伴われていないことに疑問を感じる。インドネシア人は *mencurigakan* のように、慣例として目的語を省略したり、前後の文脈から明らかな場合に目的語を省略する。これが学生たちが文法が分からないと言う要因のひとつであり、授業では慣例や例外をひとつずつ丁寧に覚えてほしいと伝えている。だがこういった単語を語劇で何度も聞き、まるごと文章で覚えてしまうことは、非常に効果的な学習である。(ただし *Aku mendengar sesuatu yang mencurigakan* の場合は *mencurigakan sesuatu* のように、*sesuatu* が目的語となるが、*sesuatu yang mencurigakan* と関係代名詞 *yang* を用いて *sesuatu* を *mencurigakan* するという構造になっている)。

質問 5 では語劇でしか学べなかった技能を聞いたが、会話で使う言葉や、敬語とくだけた言葉の使い分け、リアクションの言葉など、日常のコミュニケーションで必要とされる技能を回答した学生が多かった。

質問 6 と 7 では語学の技能の他に得られたものと、後輩へのアドバイスを求めた。18 人もの学生が「団結力」と回答しほか、辛抱強さや他のクラスの学生と仲良くなれたなどの回答もあり、語劇の制作は仲間と協力して何かを成し遂げた、という良い思い出として刻まれたようである。これは後輩へのアドバイスに、「どの仕事も平等に大変だということを忘れないで」「協力的な姿勢が大事」などが挙がっていたことから分かる。「ケンカはやめましょう」「みんなギスギスします」といったアドバイスがあることは、それだけ

本気で取り組んでいたことの証だろう。

5. まとめ

以上、学生へのアンケート結果から、2019年度のインドネシア語劇上演を振り返ってきた。2021年度から実施される新学習指導要領の外国語科では、「目的・場面・状況」に応じたコミュニケーション力を養うために、4技能のうち「読み・書き」よりも、「聞き・話す」技能を重視している。こういった新たに求められている外国語の能力は、語劇の制作によって得ることができただろうか。まず状況に応じたコミュニケーション力を養うという点では、学生から「言葉を使う状況が分かりやすかった」「いろいろな話し言葉の使い方が学べた」という回答が得られたように、語劇は物語のなかで会話（台詞）を多く用いるという性格から、「目的・場面・状況」に応じた話し言葉の使い方が身につけやすく、十分に有益な学習方法であるといえるだろう。

一方で、語劇の制作では「話す」技能を特化して養えるかといえば、そうではなく、アンケート結果から、すべての学生が「聞く・話す・読む」の3技能が伸びたと感じていることが明らかになった。その理由は、通常の授業で行う音読練習と異なり、自分の台詞のタイミングを誤らないために、前後の台詞もしっかり覚える必要があること、および音楽・字幕・照明の係も舞台に集中しなければ、演奏や操作のタイミングを誤ることがあった。新学習指導要領では「読み」の技能を「聞き・話す」技能ほど重視していないが、学生に限らずだれでも、読んで理解できる言葉しか、聞いて話すことはできないため、「読み」は「聞き・話す」ための基礎能力として欠かせない。「読み」の技能は、台本がやや難しめのインドネシア語を使用していたため、全員が台本の読み込みに多くの時間を費やしていたほか、特に字幕係については、何度も台本と舞台を追いながら、舞台の雰囲気と字幕をぴたりと一致させるよう調整を重ねるなど、語劇制作の全体のなかで「読み」の作業は少なくなかった。よ

って語劇の制作は、「聞く・話す」に加え「読む」を含めた3技能を有機的に養うことができる授業形態であった。

ではアクティブ・ラーニングの点からはどうだろうか。学生たちは、ほぼ全員が、語劇を通してインドネシア語の学習意欲を高めていた。実際、授業外でも台詞の暗記をしたり、友人と演技の稽古をする様子が見られたほか、「意識するのが楽しい」「知らない表現やもっと知りたいと思った」という回答があるなど、積極的な学びの姿勢が見られた。それは後輩への「ほかの人の台詞を心のなかでつぶやくとよい」「とにかくたくさんインドネシア語に触れるとよい」といったアドバイスからも伺える。よって語劇の制作は、学生たちに能動的に学ぶことを促しており、十分にアクティブ・ラーニングの手法を用いた授業形態といえる。

最後に付け加えれば、一般に外国語学習は繰り返し学ぶことが重要といわれるが、語劇制作は、なにより毎回の稽古で、半ば強制的に「聞く・話す・読む」訓練が繰り返される点でも有益であった。上記のことから、インドネシア語劇の上演は総合的な語学技能を高めるための、優れた活動といえることができるだろう。